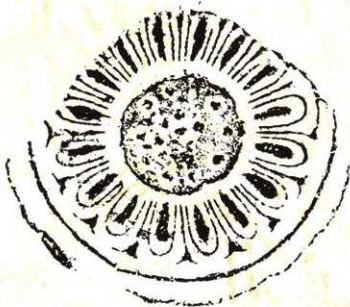


緑ヶ丘遺跡第3次調査報告書

付 伊丹廃寺築地跡の調査



1988年3月

伊丹市教育委員会

緑ヶ丘遺跡第3次調査報告書

付 伊丹廃寺築地跡の調査

1988年3月

伊丹市教育委員会



伊丹廣寺跡（南より）

（中央が伊丹廣寺跡、写真北端中央空地部分が、今回の調査範囲）

写真エンジニアリング提供



調査区全景（西より）



a. 伊丹廣寺回廊北側出土瓦



b. 伊丹廣寺回廊北側出土瓦

序

私たちの伊丹市は、古い歴史と伝統に育まれてきたまちです。

今、伊丹市ではこうした歴史を今にいかした市民文化都市を創出し、活力とやすらぎの調和のとれたまちづくりをすすめているところです。

とくに、緑ヶ丘の地は、長年の発掘調査により明らかにされた伊丹廃寺跡が所在することによく知られています。

伊丹廃寺跡は8世紀初め、この地に建てられた法隆寺様式の寺の跡で、昭和41年に国の指定史跡となり、その一部は既に史跡公園として、保存整備されています。

このたびの発掘調査は、大阪防衛施設局による陸上自衛隊中部方面總監部内、通信局舎新設工事に先立ち、伊丹廃寺跡に隣接すること、緑ヶ丘古墳群の分布域であること、さらに縄文時代にまで遡る遺跡の存在が推定されている地域であることから、埋蔵文化財の事前調査として実施しました。

調査は村川行弘大阪経済法科大学教授のご指導を得て、伊丹市教育委員会が実施し、発掘調査の成果をここに報告書としてまとめることができました。

この報告書により、ふるさとの先人の生活の一端でも知っていたき、そのことによって郷土の歴史的遺跡や埋蔵文化財に対する理解や認識をさらに深めていただけるならば、幸いであります。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた大阪防衛施設局、陸上自衛隊中部方面總監部の方々および村川行弘大阪経済法科大学教授、村川義典大阪府立豊島高校教諭をはじめ関係各位のみなさま方に心より厚くお礼申しあげます。

昭和63年3月

伊丹市教育長 佐坂 茂男

例 言

1. 本書は、大阪防衛施設局による通信局舎新設工事に伴う、緑ヶ丘遺跡第3次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。(兵庫県伊丹市緑ヶ丘7丁目1番地)
2. 現地での発掘調査は昭和62年7月15日から同年9月8日まで行ない、出土遺物の整理作業をそれ以後翌年3月31日まで実施した。
3. 発掘調査事業は大阪防衛施設局が伊丹市教育委員会に調査を委託して実施した。
4. 発掘作業は、村川行弘大阪経済法科大学教授の指導を得て、小長谷正治(伊丹市教育委員会)と村川義典(大阪府立豊島高校教諭)が担当した。またこれを補佐する調査補助員は次の9名である。

調査補助員 中井秀樹(大阪経済法科大学研究員) 村下佳子(橘女子大学卒業生) 田中賢人(大阪経済法科大学学生) 西安正治(大阪経済法科大学学生) 時枝功(大阪府立豊島高校教諭) 石田速郎(大阪府立豊島高校教諭) 大槻敏也(大阪大学学生) 鈴木市郎(大阪大学学生) 辻野尚哉(大阪大学学生)

5. 本書の執筆は次の者が担当し、編集作業を小長谷正治が当たった。

I 調査に至る経緯と経過	小長谷正治・村川義典
II 遺跡の立地と環境	村川義典
III 発掘調査の概要	小長谷正治
IV 遺構	村川義典
V 遺物	小長谷正治
VI まとめ	村川行弘
付編	中井秀樹・小長谷正治

6. 発掘調査中には、高井悌三郎・橋本久両先生より御指導を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 出土遺物および発掘調査の図面・写真等の記録は伊丹市教育委員会で保管している。

目 次

I	調査に至る経緯と経過	1
II	遺跡の立地と環境	3
III	発掘調査の概要	5
IV	遺構	9
V	遺物	17
VI	まとめ	27
付編	伊丹庵寺築地跡の調査	29

挿 図

Fig.1	周辺の遺跡	4
Fig.2	土層図	6
Fig.3	全体図	7
Fig.4	S B01実測図	10
Fig.5	S B02・S B03実測図	11
Fig.6	S B03実測図	12
Fig.7	S D01実測図	13
Fig.8	S K09実測図	15
Fig.9	池跡土層図	15
Fig.10	S B01・S D01出土瓦拓影図	18
Fig.11	S B03出土瓦拓影図	19
Fig.12	遺構外出土瓦拓影図(1)	20
Fig.13	遺構外出土瓦拓影図(2)	21

Fig.14	遺構外出土瓦拓影図(3)	22
Fig.15	遺構外出土瓦拓影図(4)	23
Fig.16	遺構外出土瓦拓影図(5)	24
Fig.17	調査区設定図	29
Fig.18	東築地跡実測図	30
Fig.19	出土瓦拓影図	31

付 図

国指定史跡摂津伊丹廃寺跡

写真図版

巻頭図版1	伊丹廃寺・緑ヶ丘遺跡航空写真
巻頭図版2	調査区全景
巻頭図版3a・3b	伊丹廃寺回廊北側出土瓦

PL.1a	調査区全景	PL.8b	池跡
PL.1b	調査区全景	PL.9	S B01出土瓦
PL.2a	S B01	PL.10	S B03出土瓦
PL.2b	S B01 (S P29)	PL.11	S B03出土瓦
PL.3a	S B02・S B03	PL.12	S D01出土瓦
PL.3b	S B03	PL.13	遺構外出土瓦(丸瓦)
PL.4a	S B03 (S P01)	PL.14	遺構外出土瓦(平瓦)
PL.4b	S B03 (S P02)	PL.15	遺構外出土瓦(平瓦)
PL.5a	S B03 (S P03)	PL.16	遺構外出土須恵器
PL.5b	S B03 (S P04)	PL.17a	S K09出土遺物
PL.6a	S B03 (S P06)	PL.17b	池跡出土遺物
PL.6b	S B03 (S P06)	PL.18a	第I区 東築地跡
PL.7a	S D01	PL.18b	第I区 東築地跡断面
PL.7b	S D01土層断面	PL.19a	第II区 瓦出土状況
PL.8a	S K09	PL.19b	第III区 溝状遺構

I 調査に至る経緯と経過

経緯

大阪防衛施設局から、自衛隊中部方面總監部内に通信局舎を新設したいが、埋蔵文化財についての問題があるか、という相談を受けたのは、昭和62年春のことである。總監部のすぐ南には国指定史跡『摂津伊丹廃寺跡』があり、その指定範囲は總監部敷地内にまで及んでいて、その外側についても『緑ヶ丘遺跡』と呼ぶ周知の遺跡がある。通信局舎新設地は、この伊丹廃寺跡の北側の比較的近いところである。廃寺跡の周辺を知る上でも重要地点であるので、発掘調査を事前に実施しなければならない旨の返答をした。

その後、発掘調査実施機関は県であるのか、それとも市なのかという問題もあったが、結局市教委が直接発掘調査を行なうことで落ちついた。その頃、市教委では民間の発掘調査を多く抱えており、とても手が回らない状態にあったが、村川行弘大阪経済法科大学教授の御好意で、調査員・調査補助員の手配までしていただいたおかげで、調査団の組織が編成されたのである。

経過

昭和62年7月15日、大学生が夏期休暇に入るのを待ち、発掘調査を開始した。調査区は既に調査前に、旧建物は取り除かれていたので、何の障害物も無く調査を開始することができた。しかし、重機によって表土を除去し始めると、旧建物の基礎が縦横に走り、また解体した建物の廃材（主にコンクリート）が埋め込まれていたりで、これを取り除く作業には時間を要した。土層は比較的単純で、厚い整地層を取り除くと薄い包含層があり、その包含層の下に地山（黄褐色粘質土）がある。遺構はすべて地山面で確認した。

遺構の数も少なく、出土遺物も僅かで、調査は順調に進み、学生の夏期休暇の終了とともに9月8日完了した。その後、すぐに整理作業に入る予定であったが、他の発掘調査に入らねばならず、本格的に整理作業を開始したのは、年を明けて1月のことである。しかし、遺物の水洗い・注記は発掘調査中に進めていたのであまり時間を要することなく進行することができた。巻末に載せた付編は、昭和61年度に実施した、伊丹廃寺築地跡の調査成果である。この度の緑ヶ丘遺跡第3次調査地点は、伊丹廃寺と密接な関係があったと考えられるので、両者を合冊にすることは、伊丹廃寺の調査及び研究を伽藍の内側だけに留めず、周辺も含めて広く検討しようとするところにその意図がある。この付編をまとめる

に当たっては、当時調査補助員として参加した中井秀樹君の手をわずらわすことになった。

調査日誌抄

7月15日(水)曇。発掘調査第1日。調査予定地に東西45m・南北25mのトレンチを設定する。

7月17日(金)雨。トレンチ南側より重機で掘削を開始、調査地全体に旧建造物のコンクリート基礎が残っていた。

7月24日(金)晴。重機による掘削終了。西側は埋土の中に多量の瓦片(奈良時代)が含まれており、池を埋めた跡と思われる。東側は表土を除去すると黄褐色粘質土の地山となる。遺物整理作業も発掘調査と併行して行なう。

7月28日(火)晴。トレンチ西側に池跡遺構を確認。埋土から近世の丹波焼・陶磁器・銅製の簀(カンザシ)検出。遺物洗浄・ネーミング・接合作業。

8月3日(月)晴。トレンチ内に5mグリッド設定。東西をA～I・南北を1～9とし、北西の杭番号でグリッド名を付す。F5区より東側にはしるSD01(溝)検出。

8月7日(金)晴。SD01表面検出。H4・5区で直径40cmの柱穴群を検出。3つは柱間約2.5mで一列に並ぶ。H3～6区の東壁土層図作成。池跡の東端検出。

8月10日(月)晴。SD01は、幅1.5～2mで東西方向にはしる。池跡埋土から奈良時代の瓦片・中世の瓦器碗出土。東区南壁土層図作成。

8月12日(水)晴。池跡南端検出。C8区で溝跡検出。自衛隊中部方面總監部・大阪防衛施設局に遺跡の概要を説明。

8月15日(土)晴。北壁土層図作成。東区清掃・遺構検出作業。池跡の東西南北の土層観察用土手実測図作成及び写真撮影。

8月19日(水)晴。SD01より斜格子叩き平瓦片(奈良時代)出土。

8月21日(金)晴。池跡写真撮影。自衛隊大阪防衛施設局と中間協議。

8月22日(土)曇時々雨。東区SP02～05から、平瓦が柱穴の基礎として敷かれた状態で検出された。平板実測終了。SP01～15まで写真撮影終了。

8月26日(水)曇。E6区で一辺1mの掘方をもつ柱穴群検出。

8月27日(木)晴。遺構全面清掃。SP01～04・07～10写真撮影。SB01は、2間×5間以上の大型獨立柱建物であることが判明。平面実測図作成。SK09検出。

9月5日(土)晴。空測及び遺構全景写真撮影。SB02・03平面実測図作成。

9月7日(月)晴。SB01～03・SD01写真撮影。SB01～03の断面割り、ついで断面実測を開始。実測図整理。遺物整理作業。

9月15日(火)曇。調査終了。資材撤収。埋戻し。

II 遺跡の立地と環境

緑ヶ丘遺跡第3次調査地は、伊丹市緑ヶ丘7丁目1番地自衛隊中部方面總監部内に所在する。猪名川と武庫川の間に長尾山丘陵から舌状に延びる洪積台地の伊丹段丘が形成されており、当遺跡もこの段丘東縁部の加茂面¹¹に立地している。標高30mで、東約1kmを流れる猪名川の水面との比高差は約15mを測る。

周辺の歴史的環境を概観すると、伊丹段丘上で最も古い遺物は、伊丹段丘北縁部の川西市加茂遺跡¹²で出土した後旧石器時代のナイフ形石器・舟底形石器等である。縄文時代になると、当調査地東約150mの緑ヶ丘遺跡第1次調査地（昭和60年調査）で、後期の石鏃・削器・加工痕のあるチャート片等の石器類が出土している。石鏃は、この他数ヶ所に散布しており、段丘上に縄文遺跡が広く分布していることを推定させる。また、有岡城内縄文遺跡¹³（11次地点）では、中・後期の土坑が検出されている。弥生時代には、東に流れる猪名川流域に多くの弥生集落遺跡が分布しているが、段丘上には前述の加茂遺跡以外に大きな遺跡は無い。古墳時代では、最近の調査で二重濠が確認された中期の御願塚古墳が南約4kmにある。また当遺跡周辺には、多くの古墳が点在していたことが知られており、1970年頃の甲陽史学会による分布調査では、1基も現存はしないが多数の須恵器の散布が認められ、緑ヶ丘群集墳として公表されている。緑ヶ丘遺跡第1次調査でも、これを裏付ける6～7世紀の須恵器片が出土している。歴史時代では、当遺跡南80mに隣接する伊丹廃寺があり、昭和30年代の高井悌三郎氏を中心とした甲陽史学会の調査により、法隆寺式の伽藍配置をもつ奈良時代前期の遺構が確認されている。伊丹廃寺は、国史跡指定をうけ、その後も部分的調査が続けられ、昭和63年3月現在3次調査となっている。昭和60年、さらに伊丹廃寺周辺の調査の必要性から緑ヶ丘遺跡第1次調査が実施された。伊丹廃寺東に隣接した地点から2棟の掘立柱建造物が検出され、寺跡周辺に付属する工房や集落の存在が確認された。また、緑ヶ丘第2次調査地（昭和61年調査）では、中世のビット、瓦器などの遺物が出土している。

註1 藤田和夫・前田保夫 「伊丹の地質構成」『伊丹市史』第1巻 1971. 3

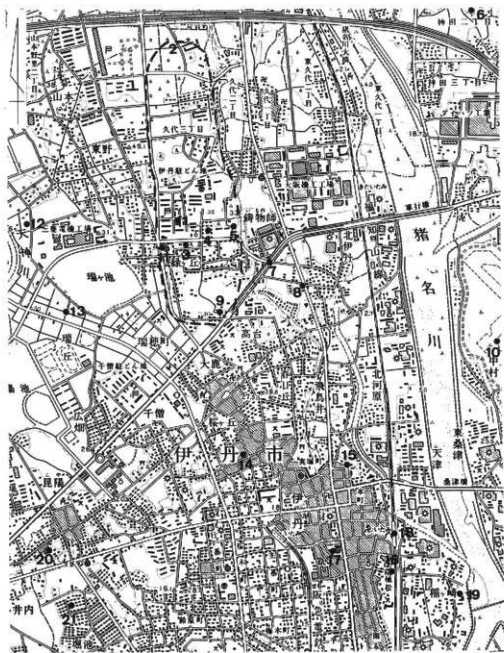
2 村川義典 「加茂遺跡84次調査現地説明会資料」1966. 8

3 浅岡俊夫 「有岡城跡（第11次調査）」『兵庫縣埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 1966. 3

4 佐原 真 「考古学から見た伊丹」『伊丹市史』第1巻 1971. 3

5 高井悌三郎 『摂津伊丹廃寺跡』伊丹市教育委員会 1966. 3

6 村川行弘・橋本 久・浅岡俊夫・村川義典 『伊丹市緑ヶ丘遺跡』伊丹市教育委員会 1966. 3



- | | | |
|----------------|-----------------|----------------------|
| 1. 緑ヶ丘遺跡第3次調査地 | 8. 北園遺跡 | 15. 有岡城内縄文遺跡 (17次地点) |
| 2. 緑ヶ丘群衆墳跡 | 9. 市民プール南側段丘端遺跡 | 16. 有岡城内縄文遺跡 (11次地点) |
| 3. 伊丹廃寺 | 10. 大阪空港A・B遺跡 | 17. 女郎塚古墳跡 (女郎塚古跡) |
| 4. 緑ヶ丘遺跡第1次調査地 | 11. 猪ヶ山城跡 | 18. 有岡城内古墳遺跡 (1次地点) |
| 5. 緑ヶ丘遺跡第2次調査地 | 12. 城ヶ山城跡 | 19. 松原遺跡 |
| 6. 神田遺跡 | 13. 城ノ中城跡 | 20. 尾陽城跡 |
| 7. 北村遺跡 | 14. 桜ヶ丘遺跡 | 21. 尾陽堀ノ内遺跡 |

Fig.1 周辺の遺跡 (1/25,000 国土地理発行)

III 発掘調査の概要

調査方法

通信局舎工事面積780㎡について当初から全面発掘を予定した理由は、自衛隊敷地内が、伊丹廃寺跡と近接することと周囲の発掘調査の成果に基づく判断によるものである。この敷地には、以前自衛隊の施設があり、その建設時及び解体時に大きく攪乱されていた。発掘調査作業の第一歩は、厚く堆積したこの攪乱層を除去することであった。攪乱層除去後はベルトコンベアを配置して手掘作業によって掘り下げていった。

調査区内に設定した測量杭は、測量会社に委託して国家座標の方眼をそのまま表わすようにした。これまで実施した発掘調査では正確な測量をしなかったために、各地点間の位置関係に多少のズレが生じることがあった。伊丹廃寺跡関連の遺跡では、なおのこと位置関係をおさえておくことが必要であろう。遺構の平面実測は1/20の図を手書きで行なったが、併せて調査区内の等高線図を作成するために気球による空中撮影を実施した。

検出遺構

検出された遺構は、掘立柱建物3棟と調査区を東西に延びる溝などである。3棟の掘立柱建物（S B01～S B03）は、建物の主軸方位を北にし、西側にS B01、東側にS B02・S B03と離れて位置している。S B01は方形の掘方をもつ大型の建物であるのに対し、S B02・S B03は柱穴の掘方も小さく建物の規模も小さい。またS B02とS B03は接して在り、各々の建物柱穴のうち1個が同一場所で重なる。ただS B03の柱穴には、瓦が沈下防止のために敷かれているが、S B02には無く、別の建物と考えられよう。この場合、重なる柱穴S P06には瓦が敷かれていることにより、S B02→S B03と建替えが行なわれた可能性が強い。S D01は、これら3棟の建物より古いが、埋土内より瓦を出土していることから伊丹廃寺創建より時期は降ると考えられる。

この他の遺構はいづれも出土遺物よりみて江戸時代以降の所産である。

層序

調査区の層序は、標準的には4層に分かれる。第1層(1～3)は主に戦後に造成された時の整地層で、その下にある第2層(4)は、近世陶磁器を包含する青灰色粘土層である。第3層(5)茶褐色土は、土師器・須恵器・瓦などを包含するが、調査区の一部でしか確認できない。第4層(6)は伊丹礫層の上部に堆積する黄褐色粘土層で、掘立柱建物などは、

すべてこの面において検出した。

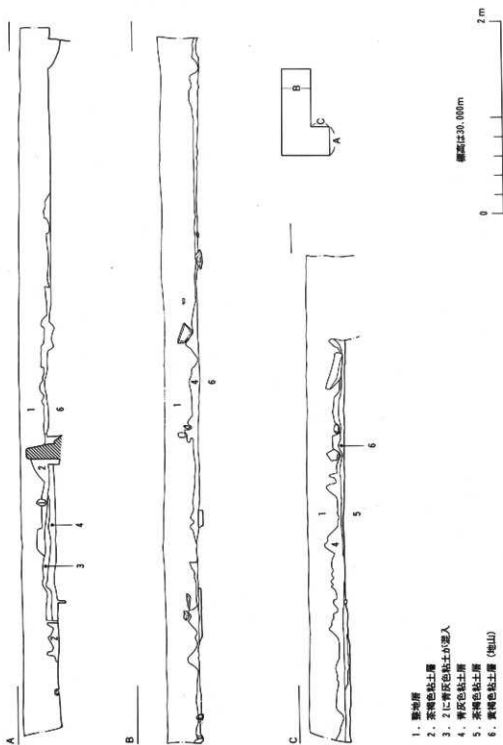


Fig.2 土層図

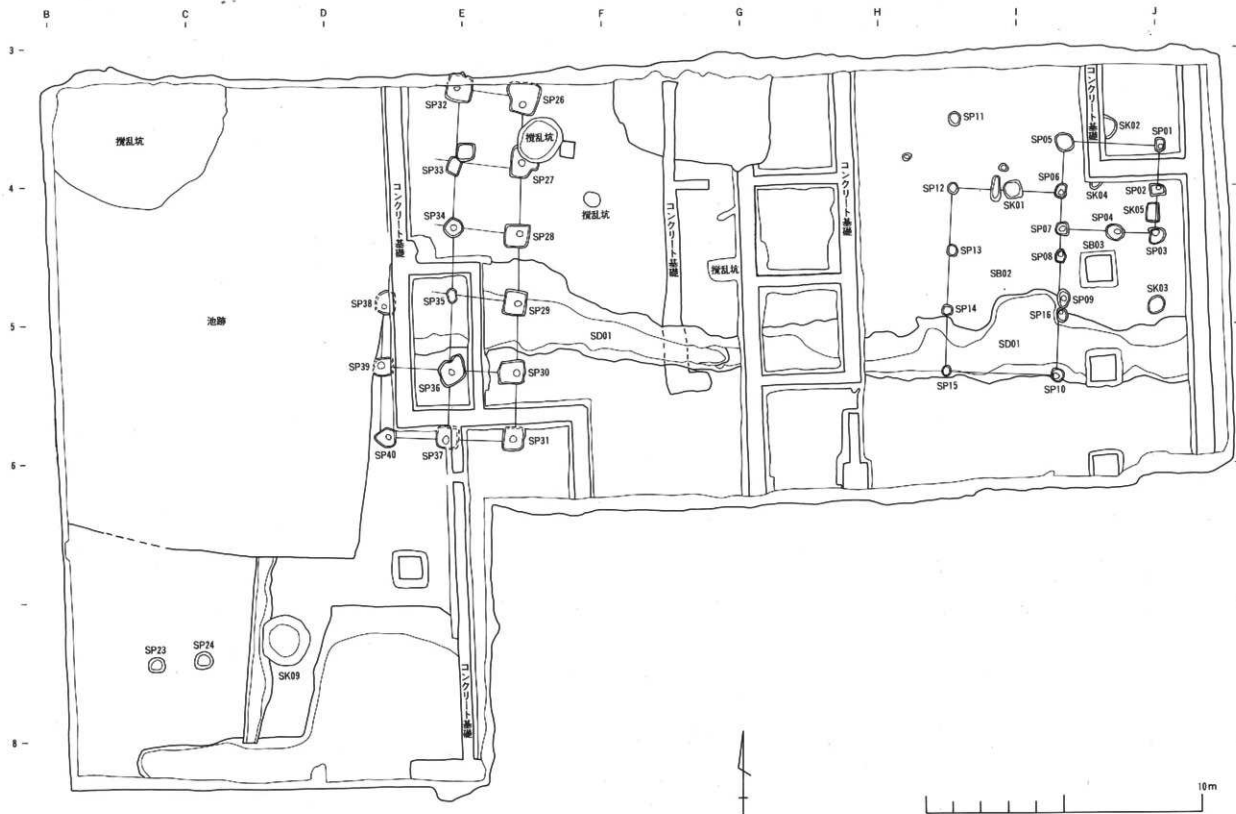


Fig. 3 全体図

IV 遺 構

主な遺構は、掘立柱建物跡3棟（S B01～03）・溝（S D01）・土坑（S K01～10）・ピット・池跡などである。

S B01 (Fig. 4, PL. 2a・2b)

調査区中央部のD5・6、E3～6区にかけて、柱間東西2間（4.5m）×南北5間（12.7m）以上の掘立柱建物跡を検出した。現状では、2間×5間までは確認できるが、西側には、近世～現代にかけての池跡があり、また北側は調査区外に入り込んでいるので、実際はさらに大きな規模の建物である可能性がある。柱穴の掘方は、内側のS P33～36の4つは不整形で、外側のS P26～32・37～40は、一辺80～90cmの方形を呈している。内側の4つは東柱と考えられ、西側にさらに続いていたならばS P38～40を棟持柱と考え、4間×5間の大規模な建物跡が考えられる。柱穴の柱当たりは径20cm程度で、深さ14～60cmを測る。柱間の間隔は、東西・南北ともに2.4mである。

遺物は、S P28で平瓦片（布目痕）1点、S P32で瓦片1点、S P35で丸瓦片（布目痕）・斜格子叩き平瓦片各1点が出土している。いずれも伊丹廃寺でよくみられた瓦で奈良時代のものである。S B01と切り合うS D01は、S P38・39の検出状況から、明らかにS B01より古く、S D01が完全に埋められた後、南北方向に桁行をもち、東西方向が梁行となるS B01が建造されている。

S B02 (Fig. 5, PL. 3a)

調査区東部のH4・5、I4・5区にかけて、柱間東西1間（4m）×3間（6.5m）の掘立柱建物跡を検出した。西側の柱列（S P12～15）は、すべて円形で、径30～40m・深さ14～36cmを測る。それと対になる東側の柱列は、近世の耕作痕により上部を削平されているが不整形な掘方である。柱当たりは径20cm程度で、深さ14～30cmを測る。柱間の間隔は東西4m、南北2.3～2.5mである。南北方向が桁行で、東西が梁行であるが、梁行が2間分の間隔があり、棟持柱に当たる柱穴が無い。今のところS B02の構造は棟持柱をもたない簡単な構造物と考えておきたい。短時間使用された工房などと考えることも可能ではなからうか。桁行の方位は、S B01と同じである。S P06はS B02が廃棄された後、S B03の柱として使われた可能性もある。

遺物は、S P06で斜格子叩き平瓦片1点、S P15で瓦片1点が出土しており、いずれも

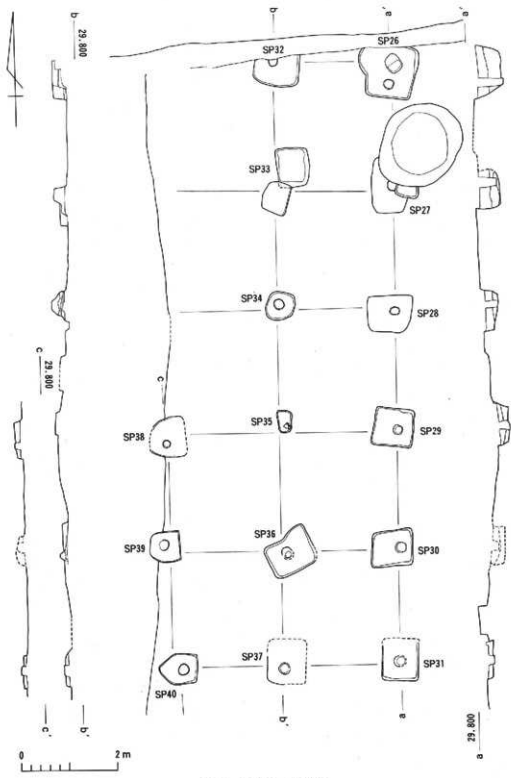


Fig.4 SB01 实测图

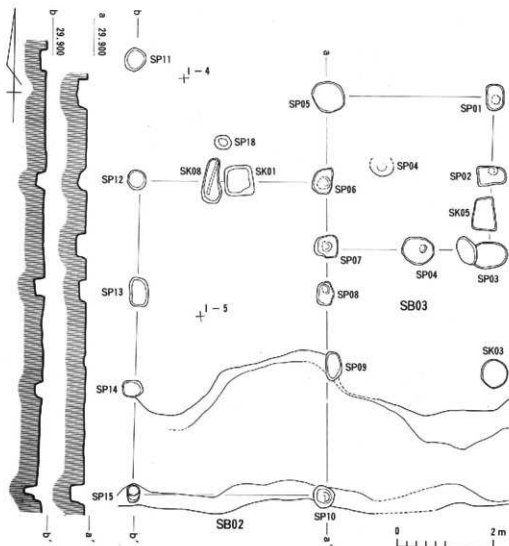


Fig.5 S B02・S B03 実測図

奈良時代のものである。

S B03 (Fig.5・6, PL.36~66)

調査区東端のI 4・J 4区にかけて柱間東西2間(3.4m)×南北2間(3m)以上の掘立柱建物跡を検出した。西側柱列(S P05~07)がS B02の東側柱列と重なっており、S P06は共有関係にある。S P06の形状から、S B02が廃棄された後、S B03の柱穴として再利用されたもの、と一応考えたい。東側は、コンクリート基礎の攪乱により柱穴は確認できないが、調査区外の東側へ延びる可能性もある。各柱穴の掘方は近世の耕作痕やコンクリート基礎の攪乱により上部が削平されているため不整形である。柱穴の柱当たりは、

径20cm程度で深さ15~33cmを測る。S P 01~05は柱穴の底に瓦片が敷かれており、柱の圧力により割れた状況で検出された (Fig.6)。基礎として使用されたものと思われ、すべて柱当たりの中心に置かれていた。S P 01からは、平瓦片 1点、S P 02は斜格子叩き平瓦片・丸瓦片 (布目痕) ・須恵器甕片・土師器片各 1点、S P 03は斜格子叩き平瓦片・縄目叩き平瓦片各 1点と平瓦片 (布目痕) 3点、S P 04は斜格子叩き平瓦片 2点、S P 05は

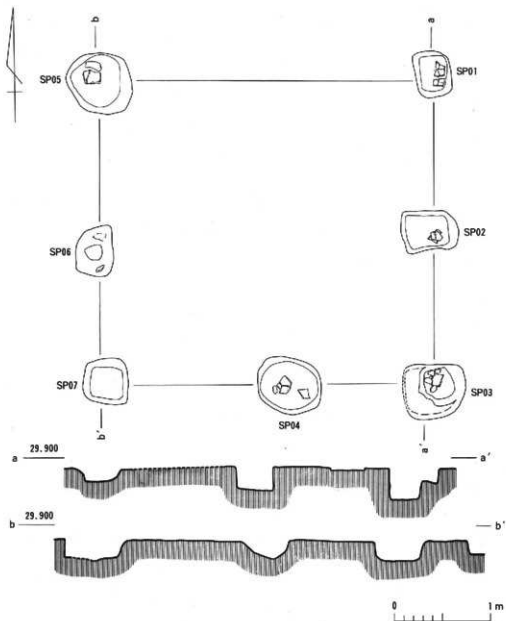


Fig. 6 S B 03 実測図

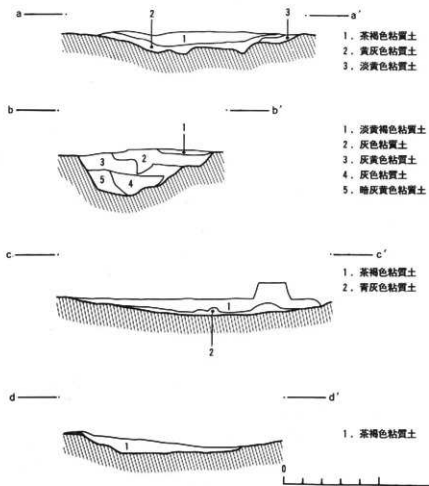
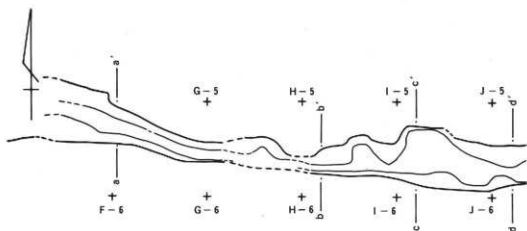


Fig.7 S D01 実測図

斜格子叩き平瓦片3点が出土した。S P05では平瓦2枚を重ね、さらに平瓦1枚を横に立てて柱を補強している状況にあった。S P06斜格子叩き平瓦片が、柱当たりの側面に張り付けた状況で出土した。S P07のみ遺物は無かった。遺物はすべて奈良時代のものである。

以上3棟の掘立柱建物跡は、規模・形態・出土遺物から緑ヶ丘遺跡第1次調査のS B01・02と類似しており、伊丹庵寺創建期よりは下ろうが、伊丹庵寺に関連する建造物と思われる。

S D01 (Fig. 7, PL. 7a・7b)

調査区中央のD4・D5区からJ5区まで東西にはる溝である。西側は、近現代の池跡により切断されており、東側は、さらに調査区外へ延びよう。今回の調査では最も古い遺構で、S B01・02と重なっているが、いずれもこの溝が埋められた後に、S B01・02が建造されている。溝幅は1~3mと一定しておらず、深さも20~48cmと深淺がある。形状からみて自然流路の可能性もあるが、この地域の流路は南北方向に流れており、また伊丹庵寺の北築地と併行しているため関連した遺構とも考えられるが、今のところ不明瞭である。

遺物は、伊丹庵寺創建期の斜格子叩き平瓦片1点、平瓦片3点、丸瓦片2点と少ない。これをもって、S D01の時期を断定するのは困難である。

土坑 (Fig. 5)

調査区東端部で、近世の土坑(S K01~06)が検出された。いずれも攪乱を受けており、浅く、深さ10~20cm程度である。S B02・03に比べて埋土が明らかに異なり、灰色粘質土であった。近世末の磁器細片が含まれていた。

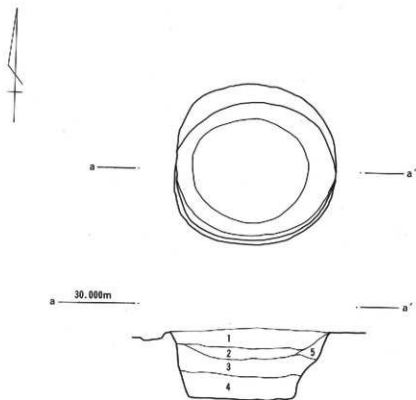
S K09 (Fig. 8, PL. 8a)

調査地区南部のC7区で直径1.7m・深さ76cmの土坑を検出した。S D11の後に掘られた状況で内側に蓋を置いたと思われる段がある。

遺物は、近世の陶磁器(碗・播鉢・甕)、土師質の皿、瓦片である。近世末期の遺構であろう。

池跡 (Fig. 9, PL. 8b)

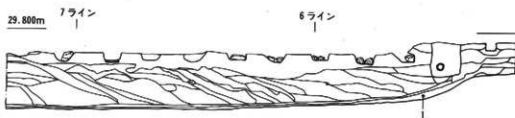
調査区西側のB3~6・C3~6・D3~6区にかけて近代~現代の池跡を検出した。自衛隊所蔵の昭和23年に写された航空写真に写っており、台形の灌漑用貯水池の東端部と思われる。池は平底で、深さ約1.2mである。自衛隊中部方面總監部造成時に埋められたらしく土層図で見ると、北側から南側へ埋めていった状況が明確にわかる。池底の堆積物の中にはガラスビンなども含まれている。埋土は、周囲の土砂を利用したらしく、奈良時代の瓦片・須恵器・土師器・中世の瓦器碗、近世の陶磁器・銅製の管などが出土した。北西隅は自衛隊旧建物を撤去した際にゴミ穴として掘られた攪乱坑である。



1. 淡赤褐色砂質土
2. 淡緑灰色砂質土
3. 淡緑灰色砂質土 粘性強。
4. 淡緑灰色砂質土 粘性強く、3~5cmの礫を含む。



Fig.8 S K09 実測図



1. 黒色泥層 陶磁器、ガラスビン含む。



Fig.9 池跡 土層図

その他の遺構 (Fig.5)

この他、近世の耕作痕と思える、南北方向にはしる幅10~90cm程度の溝が、同一方向に7本、調査地東部に集中して検出された。また、SK09と切りあう溝SD11も同じ方向である。いずれも近世末の陶磁器類・瓦片を埋土に含んでいた。緑ヶ丘遺跡第1次調査地でも、南北方向の耕作関係のものと思われる溝が6本検出されいおり、付近一帯が近世には田畑として耕作されていたと思われる。

さらに、時期不明の土坑(SK08)・ピット(SP11)がある。SK08は杭状の、長さ75cmの木材を埋納している。またSP11は、SB02の西側柱列の北側延長上に位置し、SP12との間隔は2.5mである。SP11をSB02の一部と考えるならば、東側に対になる柱穴が無く不自然である。SK08・SP11ともにSB02の他の柱穴内の埋土とは、色調がやや異なり、時期が下ると考えたい。

V 遺 物

今回発掘調査を実施した緑ヶ丘第3次調査地点は、伊丹廃寺の北側にあたり、北側築地からの距離は70mほどある。この北側築地と調査区の間には自衛隊の鉄骨建物があるが、戦後、間もない頃の建造であるので、発掘調査は実施されていない。この度の調査は、廃寺寺域の外側にあって重要な地点であるとともに、これまで実施されていなかった自衛隊駐屯地内での発掘調査ということで大きな期待をしていた。

検出された遺構については前章で詳しく述べている。本章では出土した遺物のうち、主要なものを取りあげ説明したい。

出土遺物は総数976点。このうち瓦が684点を占め、全体の70%にのぼる。この他の遺物では、江戸時代以降の陶磁器と少量の須恵器・土師器などがある。出土遺物のすべてが破片で、完形品が無く、しかもかなり細かく砕かれていることが特徴である。出土状況をみても集中することが無く散在するという程度である。

瓦 (Fig. 10~16, PL. 9~15)

瓦は調査区全域に均しく分布し、掘立柱建物付近に集中する傾向は全く認められない。遺構からの出土は、S D01のように埋土中に少量が流込んだ場合と、S B03の柱穴のように底面に瓦を敷き、礎板・礎石のように柱の沈下防止用に使われた場合がある。底面に敷かれた瓦は、磨滅が著しく廃物を利用したと考えられる。

出土瓦には軒丸瓦・丸瓦・平瓦の3種類が認められる。軒丸瓦は2点出土するが、その内1点(PL.13-20)は瓦当面を著しく欠損するため文様は不明。もう1点(PL.13-22)は丸瓦頂部の目釘孔によって判明できる程度である。前者は凹面に粗い布目を残し、色調は灰褐色を呈すのに対し、後者は凹面に細かい布目と斜目に深切り痕を残している。焼成は良好で灰色を呈す。

丸瓦には、行基葺丸瓦と玉縁付丸瓦の2種類がある。行基葺丸瓦と識別できる瓦は、S B03(S P02)から出土した5(PL.10-6)と、遺構外から11(PL.13-18)が出土している。前者は凹面狭端部及び側面に浅く面取りが施され、凸面は縦に「篋撫で」が施される。厚みは2.0cmである。後者は凹面側部のみ幅狭く、浅い面取りを行ない、凸面には轆轤水挽き痕が認められる。厚みは薄く、1.2cmを測る。両者とも灰色を呈す。玉縁付丸瓦は、玉縁部を残す1点(PL.13-21)の他は10と14(PL.9-2)が、胴部の径が一定なこと

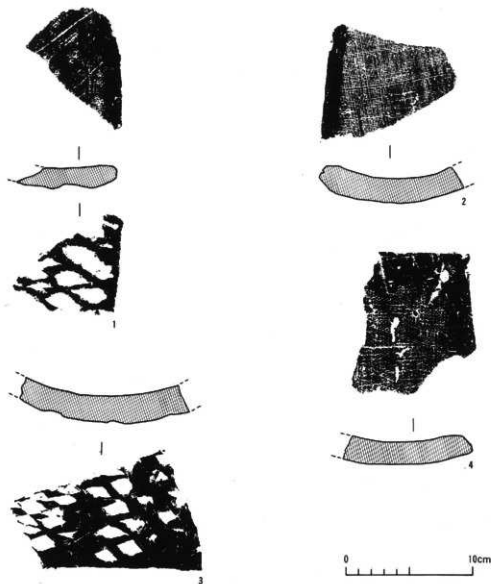


Fig.10 S B01・S D01出土瓦拓影図（1・2はS B01、3はS D01）

を認めればこれに含まれる。玉縁部を残す、PL.13-21は、胴部と玉縁部を別に作り接合していることが凹面の継目の状態から容易に判別できる。この部分には粗い布目痕がよく残されている。色調は黄褐色で焼成はあまい。14は凸面に僅かに縄目を残し、凹面には粗い布目が残る。また凹面には縦に溝状の窪みが通っている。色調は黒色を呈す。この他の丸瓦（Fig.12-10・12, PL.13-19・23・24）については、破片で、しかも磨滅が著しいため丸瓦と判断できる程度である。

平瓦には格子目叩きと縄目叩きの2種類がある。さらに格子目叩きは格子目の大きさ・

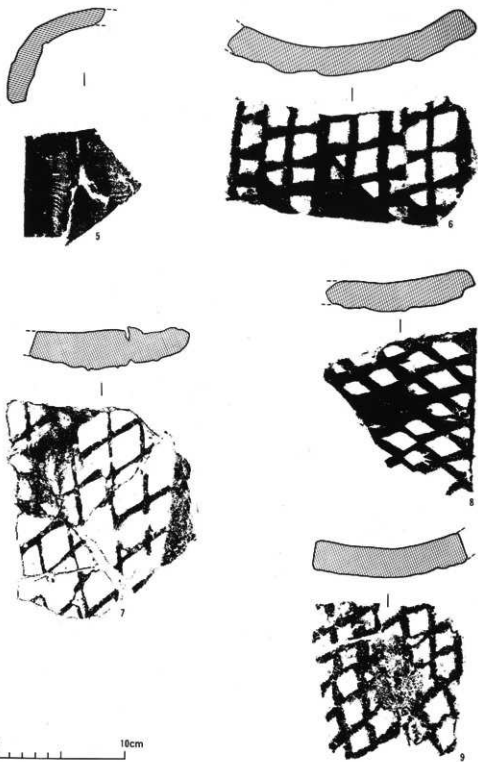


Fig. 11 S B 03 出土瓦拓影图

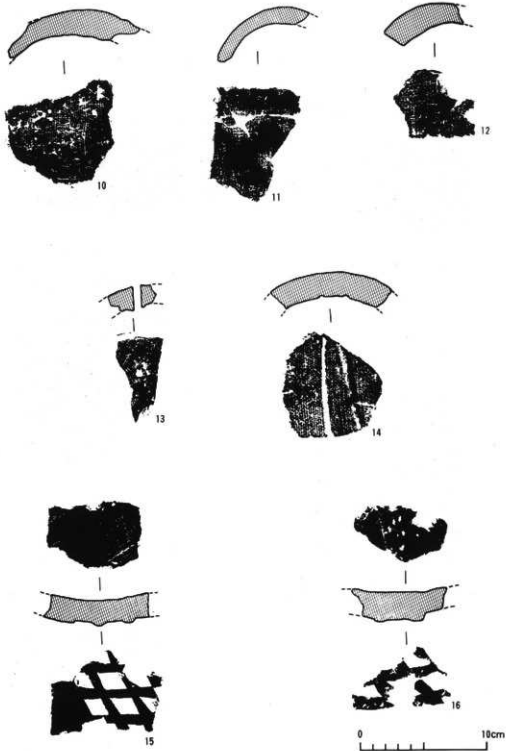


Fig. 12 遺構外出土瓦拓影圖(1)

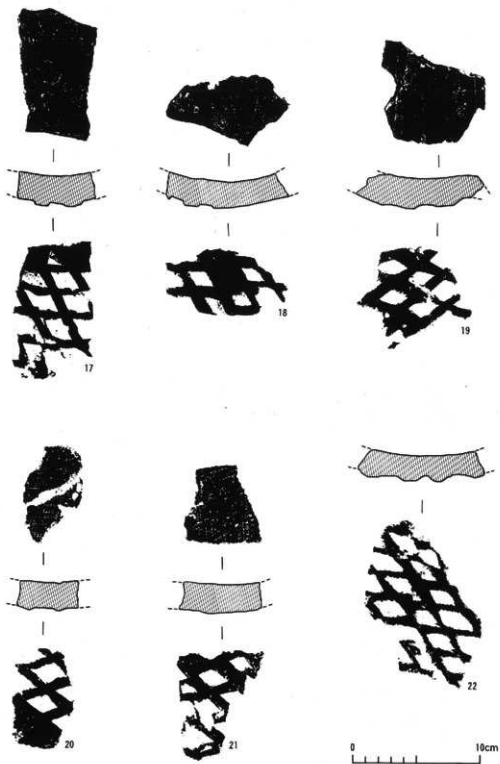


Fig. 13 遺構外出土瓦拓影圖(2)

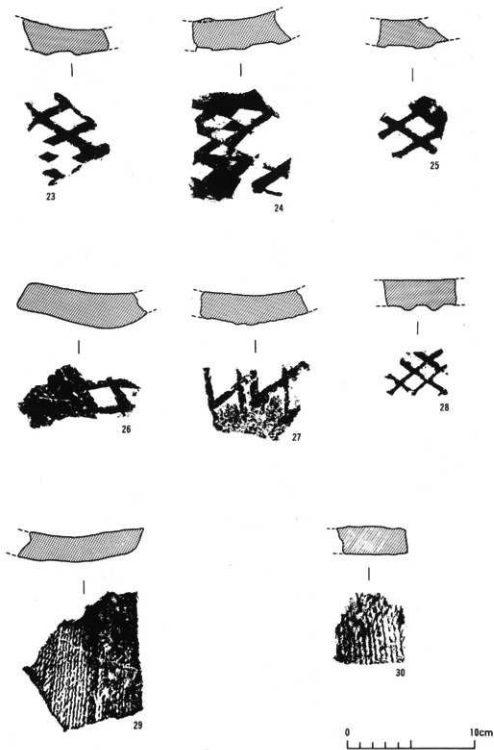


Fig. 14 遠構外出土瓦拓影圖(3)

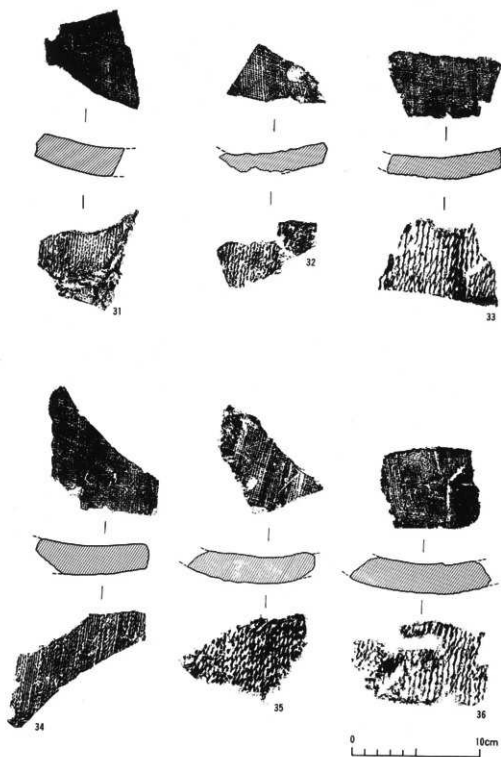


Fig. 15 遺構外出土瓦拓影図(4)

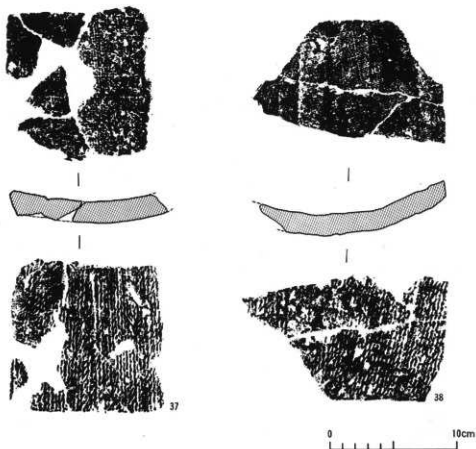


Fig. 16 遺構外出土瓦拓影図(5)

形によって4種類に細分でき、同様に縄目叩きについても縄目の粗密によって3種類に分けられる。ここで、格子目叩き平瓦をA～D、縄目叩き平瓦をA～Cに分けて説明を加えていきたい。

格子目叩き平瓦Aは、格子目の1辺が1.5～1.8cmの菱形を成し、格子目の条線が5～8mmと太めである。焼成は良好で、色調は灰色を呈するものが多い。厚みは2cm程度である。これに該当する瓦には1・3・8・15～26がある。3・8・19を除いて、いずれも凹面に細かい布目痕を残している。3・8はいずれも布目を篋で撫で消すが、8は僅かに布目を残している。

格子目叩き平瓦Bは、格子目の1辺が1.5～2.0cmで方形に近い形を呈している。凹面は布目を篋で撫で消している。厚みはAよりもやや薄く1.8～2.0cmである。色調は灰褐色、焼成はあまく、軟質である。該当する瓦は6・9の2点だけである。

格子目叩き平瓦Cは、格子目の1辺が2.5cmと大きく、条線は細い。該当する瓦は7の

1点のみである。7は焼成はあまく、軟質であるため磨滅が著しい。このため凹面については布目は僅かにその痕跡をとどめる程度である。厚みは2.5cmあり、出土瓦中最も厚い。

格子目叩き平瓦Dは、格子目の1辺が1cm程度の菱形で最も小さい。該当する瓦は28である。焼成はあまく、赤味の強い褐色を呈している。厚みは2cmである。

縄目叩き平瓦Aは、縄目が細く、5cmあたり25～28条ある。凹面には布目が残るが、篋で僅かに撫でている。該当する瓦に31・34がある。両者とも灰色を呈すが、34の方が青味が強い。厚みは2.0～2.2cmで焼成はよく、胎土は堅緻である。側部はまっすぐに面取りされている。

縄目叩き平瓦Bは、縄目が5cmあたりに15～18条あり、Aに比べ粗くなる。側部は斜目に面取りされる。凹面には粗い布目残り、桝板痕が通っている(35・38)。一様に焼成があまく軟質である。厚みは1.5～1.7cmである。該当する瓦には29・35・37・38がある。

縄目叩き平瓦Cは、縄目が最も粗く、5cmあたりに12～13条である。凹面には細かい布目が残る。端部は側面において垂直に切れ、狭広端部においては斜目に切られる。焼成はあまく、色調は灰褐色を呈している。33・36が該当する。

その他の遺物 (PL.16・17)

その他の遺物として写真図版(PL.16・17)にあげた須恵器・陶磁器類は量が少なくいずれも細片である。須恵器には、古墳時代この地に古墳群が形成されていたことを示す資料も出土している。PL.16-45～50は甕胴部、51～54は坏である。

江戸時代以降は、SK09などから陶磁器(PL.17-55～57)の出土が認められる。池跡から陶磁器(PL.17-58～65)とかんざし(PL.17-66)が出土しているが、ガラスビンも底近くから2点出土していることからみて、戦後自衛隊施設の新設工事によって埋め戻されたと考えられる。

まとめ

以上、出土遺物について概観したが、中でも出土量の多い瓦について整理しておきたい。出土した瓦について分類したが、これは伊丹庵寺内出土の瓦と比較し、その関連をみることに意図がある。昭和33年から足かけ9年の歳月を用いた伊丹庵寺伽藍の調査では、多数の瓦が出土しており、高井悌三郎氏は、報告書『摂津伊丹庵寺跡』の中で、瓦について詳しく分類されている。今回出土した瓦と、庵寺出土瓦を比較してみると本遺跡の格子目叩き瓦Aは高井氏分類の平瓦Iに、同Cは平瓦IIに、縄目叩き平瓦Aは平瓦Ⅵにそれぞれ対応し、これをみる限り、庵寺との関連は強いと考えられる。

ただし出土した瓦は、その量・種類・出土状況からみて、検出した掘立柱建物が瓦葺きであったとは言いきれない。何かの要因で庵寺内から運び込まれた瓦なのか、付近に瓦葺

きの建物が存在していたのかどちらとも言えるのである。

今回の発掘調査では遺物の出土が極めて少なく、しかも瓦以外に掘立柱建物に伴う遺物は無かった。よって掘立柱建物の存続時期を、出土遺物から断定することは困難なことである。しかし、調査区内で出土した須恵器の破片には、奈良時代に比定される坏や坏蓋を認めることができるので、およそ伊丹庵寺存続期間には、当地点に掘立柱建物が建てられていたと推定されるのである。それでは、掘立柱建物建立と伊丹庵寺創建に関してはどうかであろうか。本調査区出土の瓦が、伊丹庵寺内から出土した瓦と同様であることは先に述べたが、この瓦が遺構内から出土している。調査区内で最も古い遺構はS D01(溝)であるが、この埋土中からは、伊丹庵寺創建期に供されたと同様の格子目叩き平瓦が出土している。仮りにこの溝の時期を伊丹庵寺創建期と同じ頃と考えても、この溝が埋没した後、この上に建てられた掘立柱建物(S D01・S B02)は、創建期より時期が降るとみなければならぬだろう。

以上の結果、本調査区内検出の掘立柱建物は、伊丹庵寺伽藍建立の後に建てられ、伊丹庵寺が営まれた期間に併行して存続していたと考えられるのである。

掘立柱建物の性格については、いまのところ不明と言わざるを得ないが、建物の時期と立地からみて伊丹庵寺関連の施設と考えられるのである。

伊丹庵寺伽藍の外側については、まだあまり調査の手が及んでいない。前回第1次調査²¹⁵においても掘立柱建物が検出されていることを考えなければ、今後さらに周辺の調査を徹底する必要がある。

註1 この古墳群は緑ヶ丘古墳群と呼ぶが、発掘されないまま戦後、自衛隊の前身である警察予備隊がこの地におかれた時、造成破壊された。

註2 高井徳三郎『摂津伊丹庵寺跡』伊丹市教育委員会 1966

註3 村川行弘・橋本久『伊丹市緑ヶ丘遺跡』伊丹市教育委員会 1986

VI ま と め

緑ヶ丘遺跡は伊丹段丘東縁部の加茂面に立地し、標高30メートル・比高差15メートルを測る地域である。この地域の北縁部に所在する加茂遺跡は、多目的刃器（不定形刃器）の多量出土など石器量の多いことで弥生時代の標式遺跡の一例として学史的にも著明であり、当遺跡地域は国指定史跡の伊丹廃寺址の伽藍遺構で著明である。最近の調査では、この段丘上からは弥生時代・奈良時代の遺物以外に後期旧石器をはじめ縄文時代後期の石鉄などが発見されており、古墳時代の遺物も検出されている。

遺跡地近辺に限っても、南側には廃寺址があり、塔・金堂を囲繞する廻廊、東辺を限る築地跡なども確認されており、廻廊に北接して講堂址南辺には中門・南大門址も検出されており、これらの主要地区が史跡に指定されている。しかし伊丹廃寺にともなう経蔵・僧房・その他の建造物の遺跡が不明であること、寛文年間の北村絵図によると中世には、城砦的構造物が当地域に築営されていたことが考えられるなど、綿密な調査の必要に迫られていた地域でもある。

伊丹市教育委員会の指導による緑ヶ丘地区埋蔵文化財調査団の緑ヶ丘第1次発掘調査（自衛隊宿舎地区）では、2棟の掘立柱建造物が検出され、遺瓦は伊丹廃寺創建期の瓦であり、伊丹廃寺創建に関連する構造物であることが推測された。遺物には金渡金の鈎具があり注目された。

緑ヶ丘地区埋蔵文化財調査団による緑ヶ丘第2次発掘調査（緑ヶ丘7丁目地区）では縄文後期土器片と埴輪円筒片・須恵器片などが検出され、縄文人の足跡が確実に存在すること、中期・後期古墳が存在した可能性が推測された。

陸上自衛隊総監部構内で建造物工事の計画があるため、今回の緑ヶ丘第3次発掘調査を伊丹市教育委員会直轄でおこなったが、調査目的は、築地北辺を含む伊丹廃寺関連の遺構の検出と北村絵図にみられる構造物の確認に重点をおいた。また、古墳址の確認も留意事項であった。

調査結果は、中央部で東西2間（4.5メートル）・南北5間（12.7メートル）以上の掘立柱建造物跡（S B01）、東部では東西1間（4メートル）・南北3間（6.5メートル）の掘立柱遺構を検出した（S B02）。S B02の場合は東側の柱列が削除されていた。調査区東端では東西2間（3.4メートル）・南北2間（3メートル）以上の掘立柱建造物跡を

検出した（S B03）。東側にさらに伸びる構造物の可能性がある。柱穴内には伊丹庵寺創建期の平瓦を礎板や支板的に利用した痕跡がみられた。何れも奈良時代の大形柱穴をもつ遺構である。

これらの構造物以前の遺構が中央部を東西に走る溝（S B01）である。溝幅が1～3メートル不定であること、東西方向に走っていることなど遺構の性格についての問題点はあるが、掘立柱建造物以前のものであり、この溝を埋めて構造物を造営している。

他に土坑・井戸・ピット・池などがあるが伊丹庵寺との関連したものではなく、近世以降のものである。池は昭和23年撮影の航空写真にも写されているものである。

遺物は伊丹庵寺関連の平瓦をはじめ、当地域での生活文化痕を示す近世遺物まで多様である。

遺構からは僧房・倉庫などの明確な構造物の復元は困難であるが、第1次調査でみられたと同じく、伊丹庵寺創建直後の関連の構造物と考えられる。また古墳址や北村絵図にみられる諸遺構は更に北部になることが判明した。当地域より北部の調査に期待したい。

当地域が奈良時代を中心に寺院と氏寺造営者を含む関連構造物が林立した盛時の中心地域であることは疑いなく、伊丹庵寺北側廻廊北縁部の調査でみられたように、奈良時代以来の度々の火災と災厄により消亡の運命をたどり、現在では創建者の伝承すら不明の状況である。遺構・遺物に正確な歴史の事実を語らしめるより方途がないのが現状である。



伊丹市緑ヶ丘古墳群調査風景（円墳）
昭和23年 村川行弘撮影

付 編

伊丹廃寺築地跡の調査

(Fig. 17~19, PL. 17~19)

遺跡名	摂津伊丹廃寺跡 (指定 昭和41年8月22日)
調査期間	昭和62年1月27日～3月26日
調査地域	伊丹市緑ヶ丘4・5・7丁目地内 市道北村・中野線 歩道 (南側)
調査範囲	史跡地内総延長約160m

調査の経過

市道北村・中野線歩道拡幅工事に先立ち、国指定史跡摂津伊丹廃寺跡の範囲について、その部分の発掘調査の実施と、検出された遺構の保護をはかるため、昭和62年1月27日～同年3月26日まで発掘調査を行なった。

市道は廻廊北側と講堂の間を東西に貫き、東西僧房跡南半を破壊している。拡幅する歩道は、市道の南側、廻廊に接する位置にある。直接廻廊にはあたらないが、廃寺の最も外側を巡る築地を横切ることになり、今回の発掘調査では東西築地の確認と、廻廊北側の状況の確認に主眼を置き、調査を実施した。

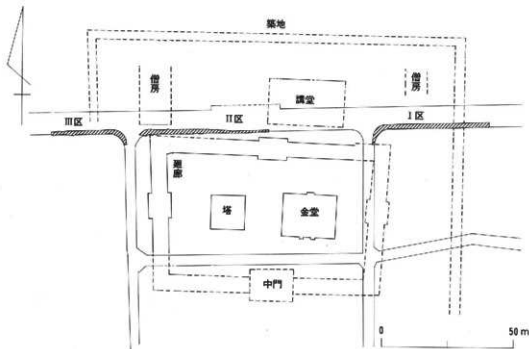


Fig. 17 調査区設定図

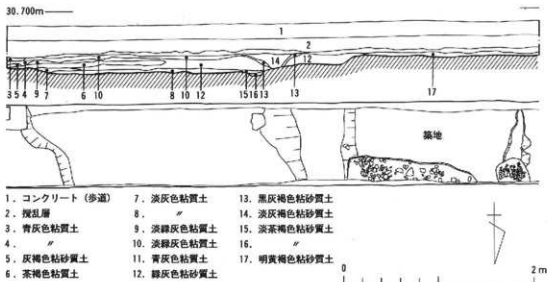


Fig. 18 東築地跡突測図

調査の概要

発掘調査に先だって、調査を実施する地区を3カ所設定した。

調査区は東から西へ第1・2・3区と番号を付した。第1区は、幅1.7m・長さ46m、第2区は、幅1.8m・長さ50m、第3区は、幅1.6m・長さ29mである。調査はコンクリート歩道、その直下近代栗石堆積層を重機で掘削後、人力により作業を進めた。

〔第1区〕

基本的な土層は、1)コンクリート(歩道) 2)栗石(近代) 3)黄褐色粘質土(土師器・瓦含む) 4)明褐色土(地山)の4層からなり、層位は全体的に安定している。深さは地表面から地山まで60~70cmを測る。

検出した遺構は、全て地山面を掘り込んで造られており、柱穴状小穴をはじめ、溝状遺構・瓦溜り遺構を検出した他、東側築地跡推定ラインより、東側へ落込む遺構を確認した。この落込み状遺構は、南北に延びると考えられ、北側で幅6.3m、南側7.2mと幅広くなる。検出面からの深さは約40cmで、底面は水平な面をなす。西側肩部は2段に落ち込み、断面は扁平な皿状を呈している。

遺構内埋土は、明確に分層可能な土砂が数層にわたって堆積しており、その状況から自然埋没と人為的な堆積が認められる。出土遺物は、上層で若干の近世陶磁器が出土、下層では、2次的に焼成を受けた瓦が検出された。

落込み状遺構西側肩部より西へ約3mの位置に幅20~50cm・検出面から深さ約5cmを測

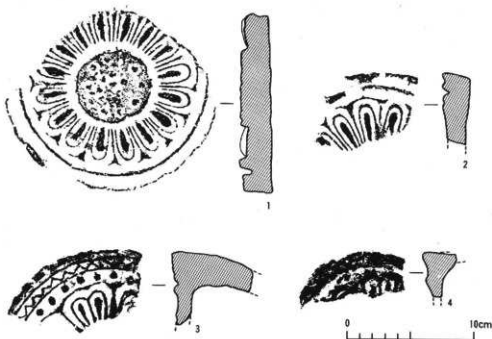


Fig. 19 出土瓦拓影圖

る南北に延びる溝状遺構を検出した。断面は、低平な逆台形を呈し、茶褐色粘質土で埋土されている。埋土内からは、赤褐色に焼けた瓦が数点出土している。落込み状遺構と溝状遺構の間隔は、築地跡推定地にはほぼ一致する場所といえるが、後世削平を受けたもようで、土台状の盛土の状況は認められなかった。

〔第2区〕

基本的な土層は、1)攪乱層 2)緑灰色粘質土 3)明黄褐色土(奈良～平安時代の瓦含む)
4)地山の4層からなる。深さは地表面から地山まで80～90cmを測る。第2層緑灰色粘質土は後世削平を受けたと考えられ、部分的にしか残存しない。

第2区では顕著な遺構は発見できなかったが、調査区中央部より瓦濶りを検出した。出土した瓦は、地山面に散乱するものと、浅く掘った土坑に一括廃棄された状態で出土したものがある。

〔第3区〕

基本的な土層は、1)攪乱層 2)赤褐色粘質土 3)赤褐色土 4)黄灰色土 5)地山の5層からなり、層位は比較的安定している。深さは、地表面から地山まで1.1～1.2mを測る。第3区は調査区の北側半分をコンクリートの側溝によって破壊されており、検出した遺構も、調査区東側部分より、南北に延びる溝状遺構と瓦の散乱する面を検出したにすぎない。

溝状遺構は、検出長1m・幅25cm・深さ約30cmを測り、断面はV字形を呈している。北側部分は、水道管の掘方によって破壊されている。

第3区では、当初西側築地跡の確認に主眼を置き調査を進めたが、その痕跡すら残っていない状況であり、出土遺物も東端部に僅かに出土した程度である。

小結

出土遺物と検出遺構の若干の考察を加えてまとめたい。

出土した遺物は、奈良～平安時代に至る瓦が大部分を占めており、格子目・縄目の叩き痕を有するものが、コンテナバット約50箱にもおよんでいる。今回、図示しえたのは、その中でも比較的瓦当の残存が良好なものに絞り、4点記載している（Fig.19）。

(1)・(2)の瓦は、第2区第3層（明黄褐色土）からの出土品で「菊花様単弁花文軒丸瓦」と称するものである。(1)は、周縁部が欠損している。中央のうずたかい子房から十六葉の花弁が菊花の様に開き、その先一圏を巡らして素縁とする。子房は径6cm、中に蓮子1+6+10=17粒を入れる。花弁は、中央子葉を2つの輪郭線が巡り、その外郭線が連結するところが隆起して楔状を呈する。周縁部は、その幅0.6cmの素縁と、一段低い圏を合わせて重圏となる。作りは比較的丁寧に仕上げられており、素縁と圏との境は明瞭で、花弁も起伏が顕著である。また瓦の背の部分には、「篋撫で」のあとが見られる。

面径は推定17cm前後、厚手のつくりで子房部で厚さ2.4cmを測る。胎土は精緻で、焼成も良好である。色調は、灰白2.5Yを呈する。

(2)は全体の瓦の残存である。花弁は4葉確認できるが、(1)と同様十六葉の花弁が開いていたと思われる。花弁は2つの輪郭線が巡り、その外郭線の連結する隆起部分は、(1)と比べて鋭さに欠く。胎土は、やや粗く砂粒を多く含むが、焼成は良好である。色調は、灰色5Yを呈する。

(3)・(4)の瓦は、第3区東側部分のコンクリート側溝の掘方からの出土品で「波状文縁複弁花文軒丸瓦」と称するものである。

(3)は全体の瓦の残存である。この瓦は、複弁子花弁が開き、その外に珠文帯（連珠7粒確認）を巡らし、波状文・素縁におさめられている。周縁から子房にいたる花弁部は、低平で盛りあがりが目立たない。花弁を巡る外側輪郭線の連結する隆起部分は鋭さが無く、丸味を帯びている。

瓦当部分と丸瓦との接合状況を見ると、ほぼ珠文帯の内側に丸瓦を据え、薄く内外に粘土を貼って、これを定着させている。その背の部分には、「篋撫で」のあとがみられる。胎土はやや粗く、焼成もあまい。色調は淡黄2.5Yで、一部灰色の部分がみうけられる。

(4)は、風化が激しく周縁部はまったく不明、僅かに複弁花文が確認できる。胎土は、

精細であるが焼成はあまり軟質である。色調は、灰白7.5Y R列を呈している。

これらの瓦当は、『摂津伊丹廃寺跡』（昭和41年）の報告書の中で分類された、軒九瓦Ⅰ（菊花様単弁花文軒九瓦）、軒九瓦Ⅱ（波状文縁複弁花文軒九瓦）にそれぞれ相当する。

軒九瓦Ⅰは、その様式からみて、奈良時代前期に属するもので、伊丹廃寺の創建時の瓦である。また軒九瓦Ⅱは、奈良時代後期に属するもので、軒九瓦Ⅰにつぐ時期といえる。

これら奈良時代の出土遺物を考慮に入れ、次に調査の成果を記す。

今回の調査区は、東西築地跡の確認と、廻廊と講堂との空白部分の状況を知る上で、重要な地域であった。しかし、調査面積が狭く、また現代の攪乱が著しい部分の調査であったため、検出した遺構の性格に関しては、検討を要する。

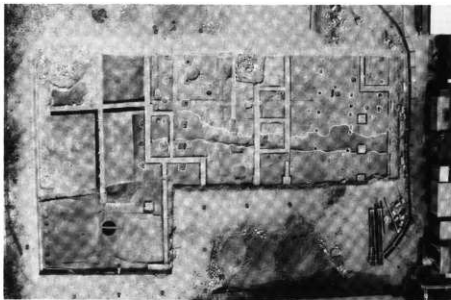
まづ廻廊と講堂との空間部分に関しては、第2区によってその状態を知ることができる。この部分は、当初より遺構の空白地域であると考えられており、発掘調査によっても顕著な遺構は検出できなかった。この調査区は最も瓦の出土量の多い地区で、奈良～平安時代に至る瓦が散乱していた。瓦は大部分が破片で、2次的に焼成を受け赤褐色に変化している。また散乱している瓦の中には、伊丹廃寺の創建された時期の瓦が含まれている。これらのことから、出土した瓦は建物廃絶後一括してこの地域に廃棄したものと思われる。

今回の調査によって検出した主要な遺構は、第1区東側で検出した落込み状遺構と、その西に位置する溝状遺構である。

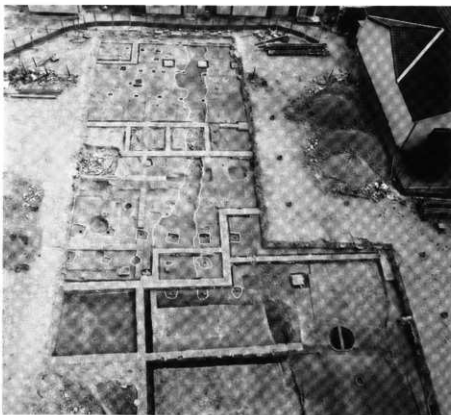
これら2つの遺構の間隔は、約3mで、築地基底部幅に近似している。また、溝状遺構と落込み状遺構との間の平坦な面は、築地推定線にはば一致する場所といえる。

伊丹廃寺の調査は、調査面積が狭く、後世削平を受けた部分の調査であったため、第1区で検出したこれらの遺構が、「築地基底部」とであると断定することは難しいが、遺構内の出土遺物から考えて、これらの遺構が奈良時代後半にまで遡ることは事実である。

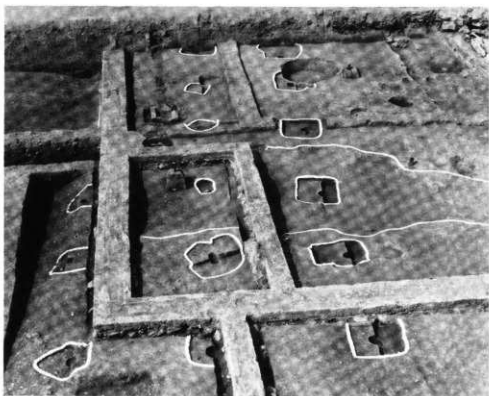
以上のことから、第1区の遺構の性格を考えると、「築地跡」もしくは、その関連遺構であると想定できる。



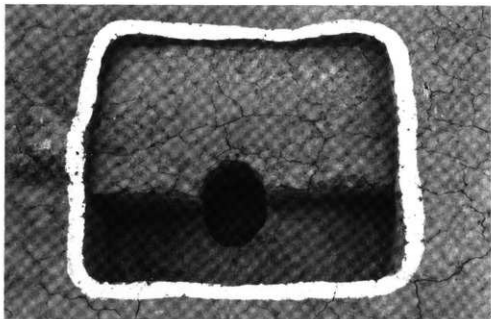
a. 調査区全景



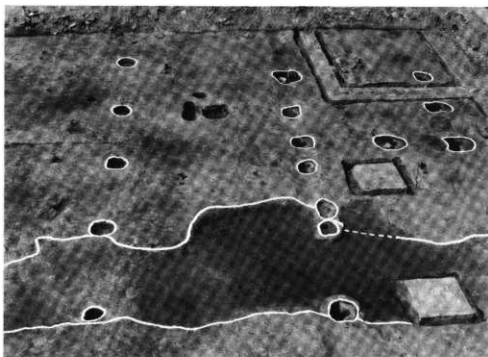
b. 調査区全景 (西より)



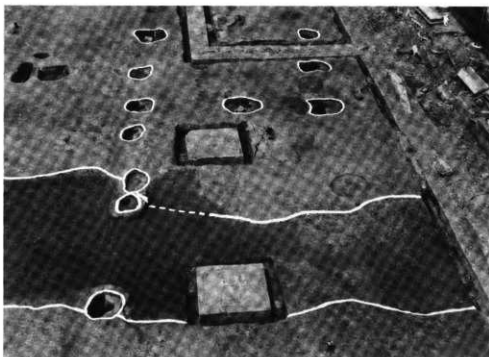
a. SB01 (南より)



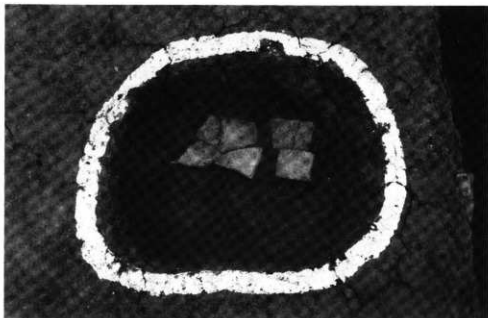
b. SB01 (SP29)



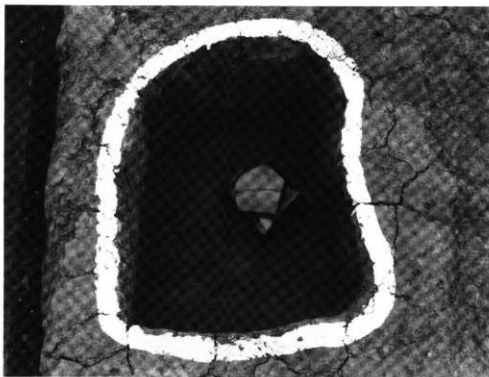
a. SB02・SB03 (南より)



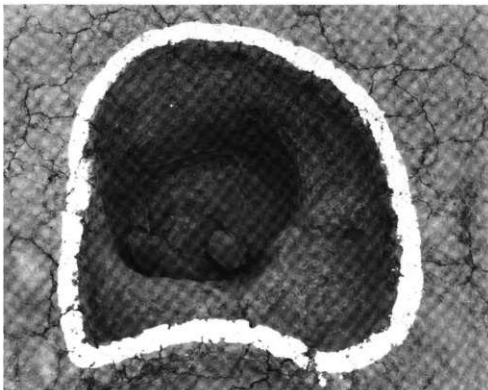
b. SB03 (南より)



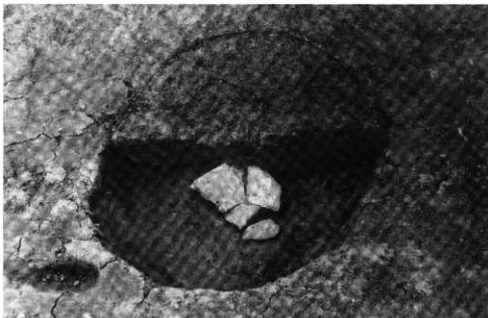
a. SB03 (SP01)



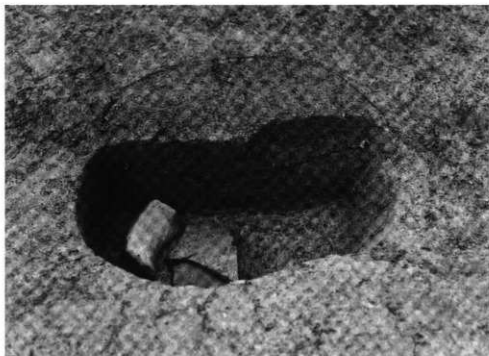
b. SB03 (SP02)



a. S B03 (S P03)



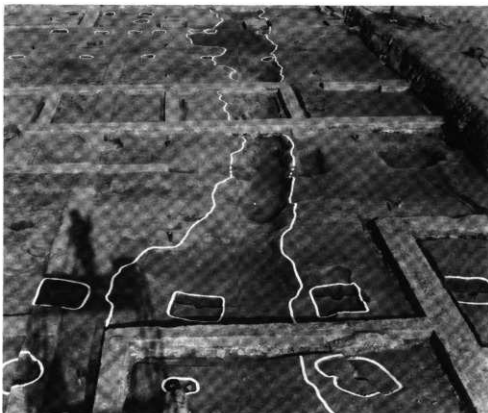
b. S B03 (S P04)



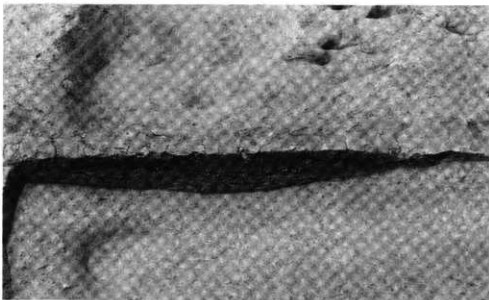
a. SB03 (SP06)



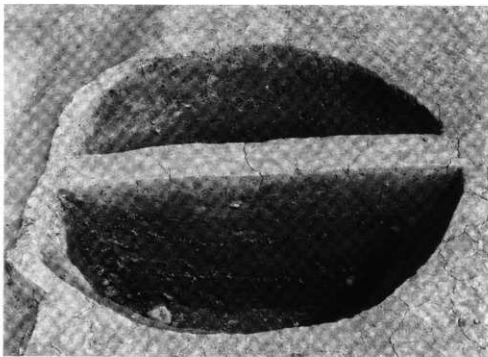
b. SB03 (SP06)



a. S D01 (西より)



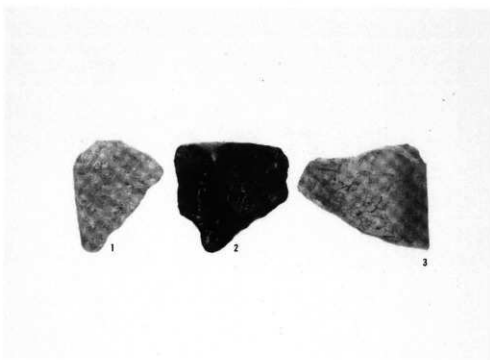
b. S D01 土層断面



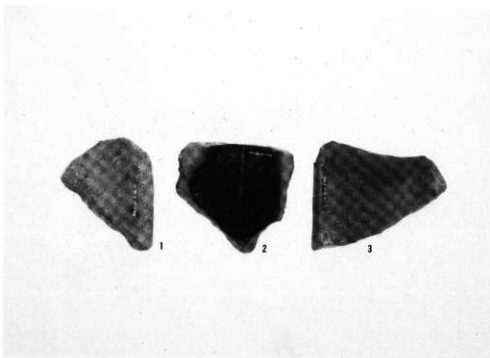
a. SK09 (南より)



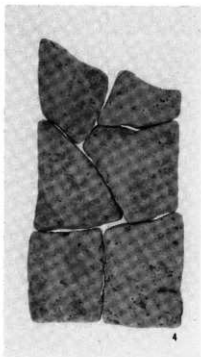
b. 池跡 (南より)



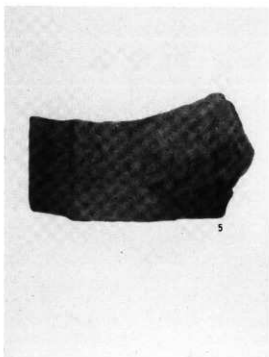
a. S 801出土瓦凸面



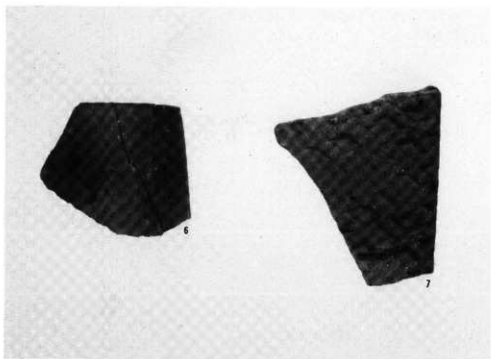
b. S 801出土瓦凹面



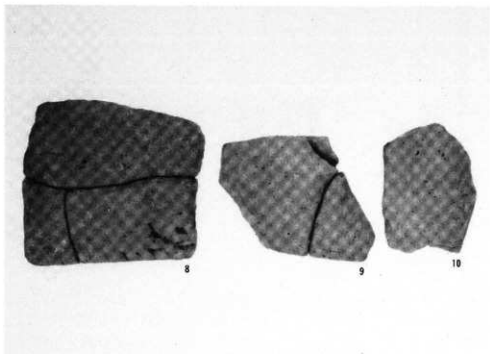
a. SB03 (SP01) 出土瓦



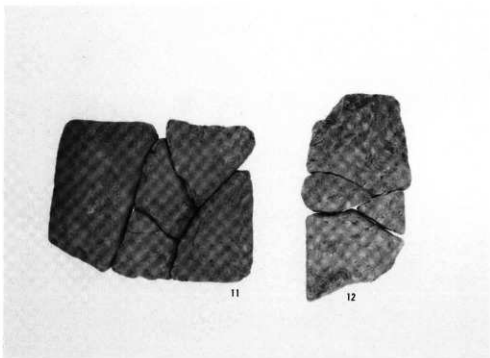
b. SB03 (SP06) 出土瓦



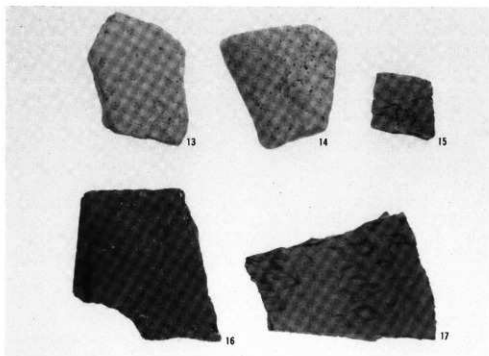
c. SB03 (SP02) 出土瓦



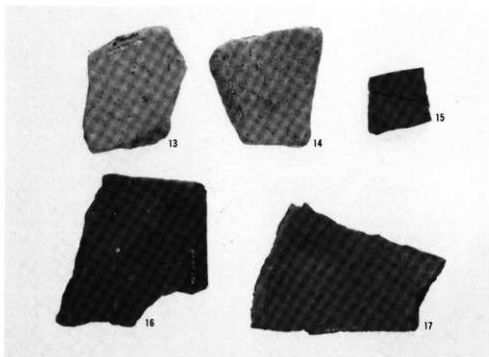
a. SB03 (SP03) 出土瓦



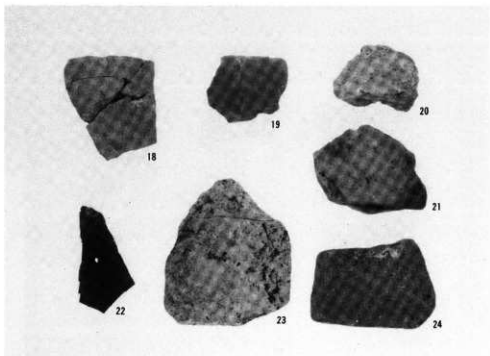
b. SB03 (SP05) 出土瓦



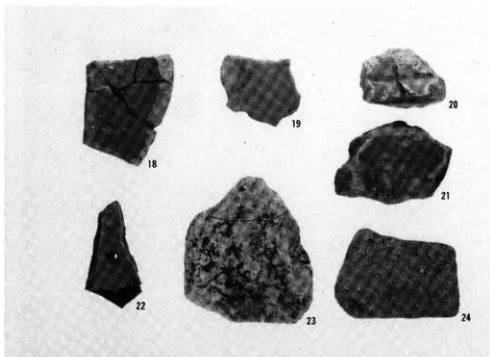
a. S D01出土瓦凸面



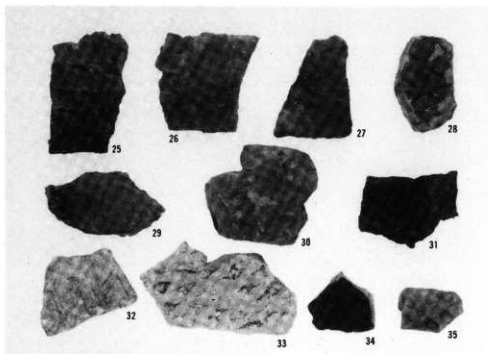
b. S D01出土瓦凹面



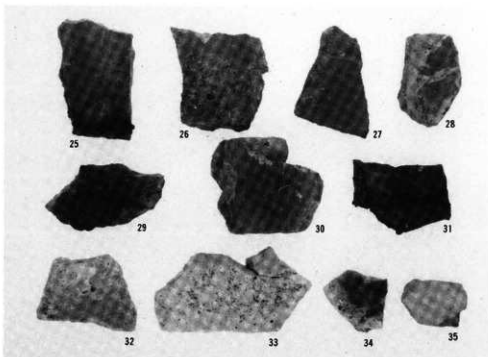
a. 遺構外出土瓦（軒丸瓦・丸瓦）凸面



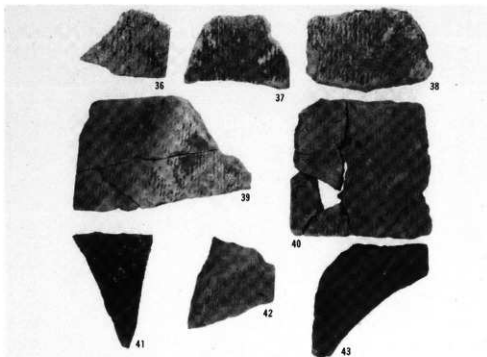
b. 遺構外出土瓦（軒丸瓦・丸瓦）凹面



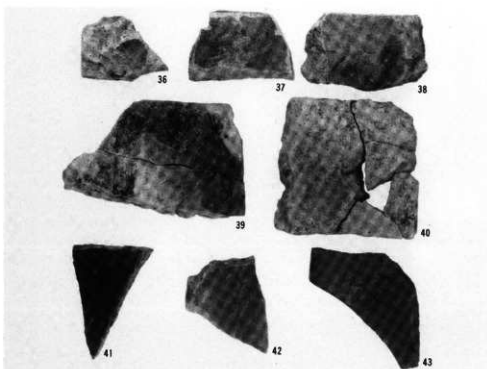
a. 遺構外出土瓦（格子目叩き平瓦）凸面



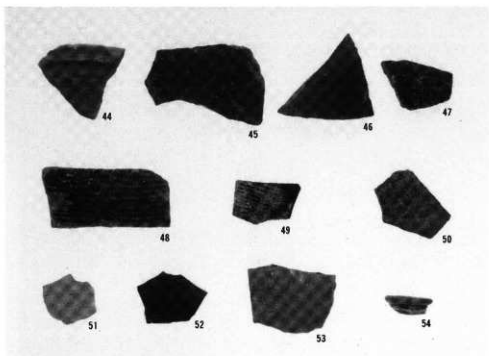
b. 遺構外出土瓦（格子目叩き平瓦）凹面



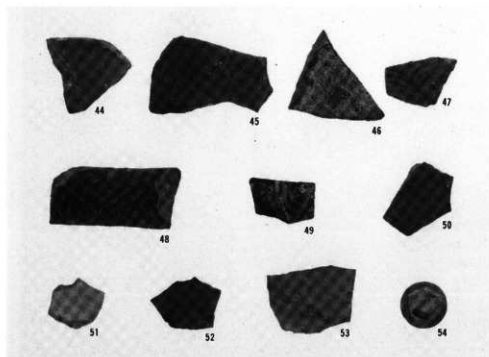
a. 遺構外出土瓦（縄目叩き平瓦）凸面



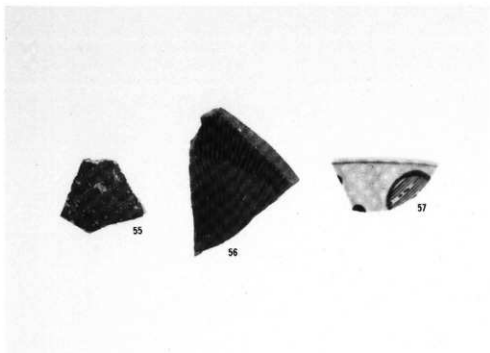
b. 遺構外出土瓦（縄目叩き平瓦）凹面



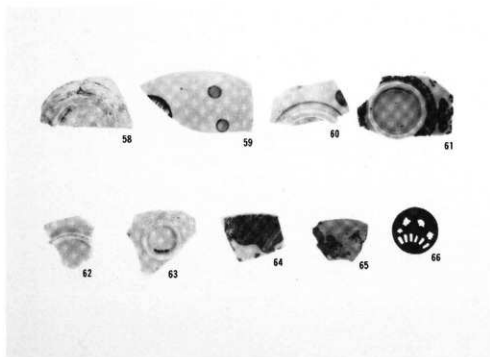
a. 遺構外出土須恵器 外面



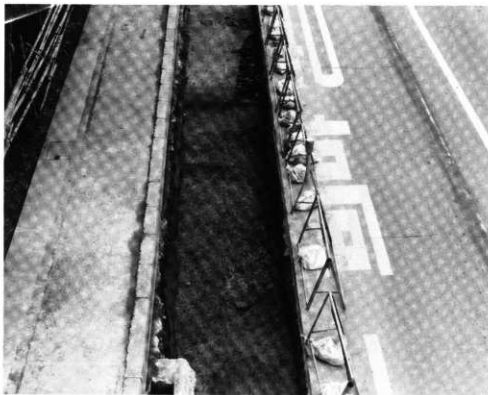
b. 遺構外出土須恵器 内面



a. S K 09出土遺物 (55 變刷部、56 摺鉢、57 磁器碗)



b. 池跡出土遺物 (58-64 磁器碗、65 土師皿、66 かんざし)



a. 第1区東築地跡（手前は、築地外側の溝）



b. 第1区東築地跡断面



a. 第II区 互出土状況（左の生垣が北側回廊にあたる）



b. 第III区 溝状遺構（東側回廊の外側にあり、回廊と平行する）

緑ヶ丘遺跡第3次調査報告書
付 伊丹廃寺築地跡の調査

1988年3月31日発行

発行 伊丹市教育委員会社会教育課
〒664 兵庫県伊丹市千僧1丁目
TEL (0727)83-1234 (内427)

印刷 アイシー印刷株式会社
TEL (0798)66-0741

